

「学風」と「家風」にふれて ——羽田先生を送る——

杉 山 清 彦

羽田正先生がかつて書かれた文章の一節に、このようにある。

「羽田亨という人には、単に一東洋史学者というだけではない別の資質が備わっていたとみなければならないだろう。…かかる人間的な温かさ、情感があったからこそ、多くの人に慕われ、総長をはじめとする要職についても、人々をよく統率してゆくことが出来たのだろう。」

一瞬、総長ではなく副学長ではないか、名前が違っているのではないか、と思えるかもしれない。しかしこれは、先生が祖父・羽田^{とおる}亨（1882-1955、歴史上の人物として敬称は略す）について書かれた評伝の一節である（『20世紀の歴史家たち 日本編下』刀水書房、1999年）。羽田亨は、日本東洋史学の開拓者の一人であるとともに、戦時下の京都帝大総長として「諸君、行き給え。しこうして帰り給え」という壮行の辞を送ったことで知られる。先生の手になるその伝記の評文が、そのままご自身の業績とお人柄をも表しているように感じられるのは、私だけではあるまい。

羽田先生は、東文研所長・副学長など要職を歴任されながら、並行して邦文・英文の編著を陸続と送り出されるとともに、さまざまな研究プロジェクトの主宰をも続けられており、行政・研究の双方で多くの人々を率いてこられている。曲者（変り者？）揃いの研究者を束ねていくには、学者としての抜群の力量だけでなく、並ならぬ統率力と人望がなければ、できることではない。親しく教えを受けたり長く交友されてきた人たちと比べればわずかな経験ながら、そのことを強く実感する。

直接接点のない大阪大学で学んだ私が初めて先生と接したのは、2003年に勇を奮って抜刷をお送りしたときである。羽田先生は、一面識もない他大学の若造に対し、近著論文とともに親しく返書をくださったのである。翌年、阪大東洋史研究室に集中講義でお迎えすることとなり、助手だった私は、初めてお目にかかってお世話させていただく機会を得た。その後、ご縁あって私は駒場に赴任することとなったが、よもや羽田先生と「同僚」となるとは思いもよらず、今も不思議な感覚が抜けない。

私が参加したいいくつかのプロジェクトの中で、とりわけ研究者としての独創性と組織人としての統率力とを両つながら発揮されたと思われるのは、大型科研（寧波プロジェクト＝通称にんぷろ）の一部会として主宰された東アジア海域史研究会である。この研

究会は、メンバーの個別論文を寄せ集める通常の成果出版の形式をとらず、共通テーマについて全員で討論する研究会や合宿を重ねた上で、原稿も分担執筆ではなく、共同で執筆・加筆修正をくり返して文字通りの共著としようという、日本の人文学では類例をみない試みを掲げた。先生ご自身が回顧されている通り、研究会での議論や原稿執筆の意見交換は毎回白熱し、「異なった見解を持つ研究者同士がどうしても譲らず、いささか険悪な雰囲気になったこともあった」が、それが破綻せずに『海から見た歴史』（東京大学出版会、2013年）というユニークな書物として完成したのは、羽田先生のお人柄と統率力があったからこそである。学問の「プランナーであり、デザイナーであり、さらにはプロデューサーであった」（杉山正明）という羽田亨に捧げられた讃辞は、先生にもふさわしいように思われる。

先生のお仕事ぶりを拝見していて強く印象づけられるのは、「知」の開拓のためには何にでも関心を示し、どんなものでも取り入れる進取の姿勢と、常に自身が変化されていくという柔軟さである。先生は、もともと近世イランのサファヴィー朝の政治史研究から出発され、私もそれに私淑したのだが、先に進んで都市・建築や社会史へと研究の範囲を広げられ、さらに陸上にとどまらず海域世界にまで踏み出された。そればかりか、2000年代以降は「イスラーム世界」という根本概念の見直し、さらには「世界史」そのものの見直しへと、歩みを止めることなく常に前に進まれている。研究者にとって自明のものであるはずの、自らが拠って立ってきた地域概念や分析枠組を疑い、根本的に批判・再構築しようという発言がどれほど勇気とするものであるかは、言うまでもあるまい。先生は、いつもおだやかな笑みをたたえられながら、しかし自らの来し方さえも見つめ直す真摯な姿勢と、批判を恐れない勇気とをお持ちなのである。別の評伝にある、「身近にあるよきものを素直に受け入れ、それを自己の中で完全に消化することの出来る、柔軟性に富んだ思考と感性の持ち主であった」（間野英二）という羽田亨評もまた、そのまま先生にも当てはまることに大方の異論はあるまい。

もっとも、このような小文を寄せることは、先生のご本意には反することかもしれない。先生は、ご自身の羽田亨伝の中で「私はこれまで、ことあるごとに人から羽田亨との関係を問われ続けてきた。亨、そして伯父にあたる明の名をどれだけ疎ましく思ったことだろう。彼らは彼らであり、私は私である」とも吐露されている。申し訳ないことながら、私もかつて羽田先生のことをそのように（仰ぎ）見ていた一人であった。だが、それでもやはり先生の歩みを拝見していて感じられるのは、そのお仕事とお人柄を表すのに、巨星・羽田亨に寄せられた評語こそふさわしいということである。もとより学問は研究者個人の営みであって、「家学」などというものがあるわけではない。しかし、学問を通じた「家風」というものはあるように感じられるし、今ではそれを引き受けておられるように思われる。組織人としてのお務めはすぐにはなくならないかもしれないが、研究者として、学問の牽引者として、これからもお導きくださるようお願いいたします。